

発刊にあたって

北方領土は、私たち富山県民にとって先人が開拓した大切な領土であり、本県に約五百人おいでになる元島民の方々にとってはかけがえのない故郷です。しかし、戦後七十年を迎えようとする今日においても、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

「私たちと北方領土」作文コンクールは、中学生を対象に、北方領土という日本の領土でありながら、日本人が自由に往来できない地域があるという現実を正しく理解し、関心を引き起こすことを目的に実施したもので、今回で八回目となります。

今回も県内全域の中学生から多数の応募をいただき、北方領土の歴史や富山県とのかかわり、国際情勢を分析しながら、現在の交流の状況などを自分で調べ、興味と関心をもって学習している生徒が多いことに驚きました。この作文集は、そのうち十三編の入賞作品を掲載しておりますが、いずれも大変素晴らしい作品であり、北方領土問題に正面から向き合って考えたこと、問題の解決には国民の強い強い取り組みが必要なこと、ロシア人との相互理解が必要であること、などが訴えられています。また、残念ながら、あと一歩で入選を逃された作品の中にも、きらりと光る素晴らしい作品が数多くありました。

これらの多くの作品から、北方領土問題解決の希望を担

う次世代の皆さんが育っていることがうかがわれ、喜びに堪えません。また、こうした学習を通して、生徒が国際的な場でも活躍できる力を身に付けてくれるものと期待しております。

また、この作文コンクールを通して、北方領土問題の正しい理解とその返還運動について、自らの考えをもち、文章に表現することは、それぞれの学校における北方領土についての授業の在り方とその内容が大きくかわってくるということを改めて実感しました。私ども県民会議と教育者会議では、県内の全中学校に北方領土に関する教育用DVDとその活用の手引きを、また、県内の全小学校に小学生向け学習資料のCDを配付しており、引き続き、北方領土教育の一層の充実に努めていきたいと考えております。

終わりに、この作文コンクールにご協力いただきました多くの皆様方に改めて厚くお礼申し上げ、発刊の言葉といたします。

平成二十七年三月

北方領土返還要求運動富山県民会議

会長 高平 公嗣

富山県「北方領土問題」教育者会議

会長 山田 英明

四島が戻るその日まで

黒部市立高志野中学校 三年 榎屋ひのき

函舞、色丹、国後、択捉。四島の人々が故郷を追われてから六十九年が経ちます。祖先の墓参りさえままならない状況が続いています。それが北方領土問題です。

現在、北方領土についてどれだけの人が理解しているのでしょうか。何百年も前から、日本の先駆者達は、劣悪な環境の中、不屈のパイオニア精神で開拓してきました。正に血のにじむ思い、あるいは命を落とされた方もいるでしょう。その努力の結果、自質なコンアの漁場の確保や、サケ・マス漁においても大きな利益を得ることができました。それが今、日本人は誰も住むことのできないロシアが不法に占拠している日本の領土なのです。

日本人が、強制送還されてから現在に至るまで、いろいろな事がありました。ロシア側からの二島のみ返還の提案もそうです。しかし、日本は妥協することなく四島返還を主張し続けました。強引に始まった地下資源開発施設の建

のでしょうか。六十九年前の悲劇はくり返したくはありません。誠意をもって事実を訴えていくしかないと思います。

私の姉には、ロシア人の友達があります。とても仲がよく、お互い理解し合っているようです。国が違っても人は分かり合えるのです。国民同士友情を深めながら、双方とも領土問題を正しく理解することで、解決していくことができると信じています。

この先どういう状況になるか分かりませんが、私は日本のみならず海外に向けても、この領土問題を発信し続けたいと思います。

北方領土問題について

黒部市立桜井中学校 三年 内山 千聖

私は前まで、北方領土問題についてあまり理解をしていませんでした。あまり興味がなかつたし、誰かが勝手に解決してくれるだろうと思っていたからです。だけど今は、

設が進むなか、諦めることなく主張し続けています。

そんな努力のなか、昨年、「日露パートナーシップの発展に関する共同声明」が採択されました。明るい兆しが見えてきたところでした。しかし、今年、ウクライナ問題が勃発。それにより、状況は一変、ロシアは緊張状態にあります。

このような情勢のなか、私は北海道派遣団として、八月三日根室の北方領土返還要求運動に参加しました。皆、熱意をもって返還コールを連呼していました。六十九年間おとろえることのない故郷返還に向けた強い気持ちが伝わってきました。しかし、それよりも私に衝撃を与えたことがありました。それは、参加者のほとんどが年配の方だったことです。私は、次世代はどうなるのか不安になりました。一部の人の問題ではなく、日本の領土なのだから、日本人の問題なのです。解決されていない今、次は私達の問題となっているのです。一人でも多くの方が北方領土について正しく理解し、次世代にその想いを繋げていかなければなりません。豊富な水産資源と地下資源が眠っている北方領土をロシアが簡単に手放すとは思えません。決して諦めることなく主張していかなければならないのです。

では、現在四島に住んでいるロシア人はどうすればいい

問題について知っていくうちに、とても大事な問題なんだと思うようになりました。

私は今年の八月、第四十五回富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団の一員として、北海道を訪れました。県内の中学生十人で、北方領土について学んできました。私がまずおどろいたのは、返還を願っている人がとても大勢いたことです。運動のシンボルである「千島桜」や「アラウンリボン」のバッジをつけた人をたくさん見ました。また、根室市民大会では教えきれないくらいの方が行進に参加していました。早期返還は、多くの人の願だというのがわかりました。

さらに、地元の中学生とも交流しました。問題についての意見交換などを通して、同世代の、しかも返還運動の中心の街に住む子たちの意見をきくことができたのは、とても刺激になったと思います。地元の人にしかわからない返還運動の気運、中学生たちの意識について知りました。同世代の子たちがとても深く考えていることがわかり、私もしつかり考えて、何かしなければと強く思えました。

そして、今まで知らなかったことをたくさん学びました。まず、日本が一方的に返還を要求してもだめだということ。今、北方領土には当時のことを知らないロシア

人がたくさん住んでいます。強制的に日本の領土にしてしまうと、その人たちが困ります。だからと言ってこのままにしておいてはいけません。日本にも故郷へ早く帰りたい方、帰れずに無念のままじくなつた方がたくさんいます。ロシア人も、日本人も、納得のいく解決をしてほしいです。そのためにも、私たち国民の世論がとても大事だということも学びました。世論を高めるためには、一人一人がしっかりと問題について認識することが必要です。以前の私のように、全く興味がない人もたくさんいると思います。だけどみんなが問題について正しく認識し、考えることができれば必ず解決できると思います。

北方領土問題は、とても難しく、デリケートで、解決するのは大変だと思います。だけど、同じ日本人の、特に富山の人のにとっては引き揚げ者も多くつながりの深い問題です。世界の問題であり、国の問題であり、私たち一人一人の問題です。一人一人が問題についてしっかりと知り、考えていくことが大切だと思います。

なく思った。

私たちは、北方領土について理解を深める学習をしています。私の個人テーマは「ロシア側と日本側の意見や、領土の歴史を理解し、自分の考えを持つ」というものだ。文献調査で分かったこととして、「両国の意見の違い」がある。日本側は「四つの島は歴史の上から見ても、日本固有の領土である。日露通好条約や樺太千島交換条約から見ても、日本以外の領土になつたことがない。」と主張している。それに対し、ロシア側は「それらの条約でいう千島列島は、歯舞群島から占守島までの島々である。」と主張しているのだ。私はこのことを知つて、「両国が和解への道を考えること」がこの問題の鍵となるのではないかと考えた。私が日本人だから、領土を返してほしいと思うように、ロシアの人々も、信じている考えがあると思う。お互いに納得できる答えというものは、存在しないのではないが。しかし、だからこそ納得できるような考え方を目指すべきだと私は思う。

講演会では、根室の高校生の方の話も聞いた。故郷を去り戻すための署名活動や講演を必死に行っていることを知つた。高校内に北方領土研究会を発足し、問題解決のために力を尽くしている姿が私の目に映つた。

北方領土返還要求運動富山県会議長賞

第一歩は「知ること」から

黒部市立高志野中学校 三年 湯田 明奈

「私たちは、ロシアの人に出ていつてもらいたいわけではないのです。ただ、故郷を返してほしいだけなのです。」

この言葉が私の胸に強く残つた。

先日、私たちの中学校で、北方領土講演会が行われた。これは、そのときにお話しされた元島民の声である。この講演会のために、私は事前に文献調査をした。どの書物にも、北方領土の返還を願う声を書かれていたが、生の声は比べものにならないくらい、私の心の中に響いた。

私が北方領土のことを初めて知つたときは、日本人だつて島に住んでいるものだと思つていた。「ロシア人と仲良くやつていられないじゃない。」そんな甘い考えだつた。

日本人が島に住んでいないこと、島には立ち入ることができないことを知つたとき、自分がとても恥ずかしく感じた。北方領土の返還を願っている人たちに、とても申し訳

しかし、私は思つた。「ここまで力を注いでも、国の問題だから、国民みんなを取り組まないと話にならないのではないか……。」

そこで私は考えた。まずは北方領土のことをたくさんの人に知ってもらふべきだと。前の自分のように、北方領土のことを知らない人も、きっと多いに違いない。だから、講演して下さつたみなさんが、私に北方領土のことを教えて下さつたように、私も学んだことを多くの人に伝えていきたいと思う。

——いつの日か、故郷が我が国に戻り、両国が笑顔でいられる日を願つて……。

富山県教育委員会教育長賞

北方領土を交流の場に

富山市立南部中学校 三年 小嶋 源

僕は、北方領土問題を解決するポイントは、日本、ロシア連邦の思いやりの気持ちにあると思います。

先日「えとびりか」巡回研修事業に参加しました。そこで、元島民の方の講話を聞きました。北方領土は、森林資源や、海産物の宝庫だそうです。そこで、家族とくらしただけなのですが、ロシアが約束をやぶり北方領土を占領したのです。僕はこの話を聞き、「自分の故郷を奪われ、なんて悲しいことだ」と思い、日本に北方領土を返還してほしいと思いました。しかし、占領されてから約七十年がたった今、日本がとりかえしたとしても、七十年の間にそこで生まれたロシアの人々は、自分の故郷から追いやられてしまい、日本が味わったような、つらい思いをすることになると思います。それではだめなのです。

日本とロシアは、三回領土を変更し合ってきました。それはその時代、戦争があつたからです。力でなんとかした時代だからです。今は、戦争を行うことがなく、話し合ひできめていかないといけない時代なのです。それなら、どつちかの国がゆずればいいじゃないかと思うかもしれませんが、しかし、北方領土を得ることで土地の資源だけでなく、二百海里水域が増えることによつて海の資源もかわつてくるからだと思います。

そこで僕は考えました。北方領土はロシア、日本、両国のものにしたらいい。理由は、両国のものにしたら同じ

分だけの領土がもらえ、水域にも問題がでないと思つたからです。さらに、両国の交流の場所となり新しい関係を築けると考えたからです。しかし、そうなると思えられるのが、文化の違いで両国の間に亀裂が生じることです。そこで、それぞれの国の文化を受けとめ、異文化理解をすることが大切になつてくると思います。

僕たちにできることは、小さなことだと思います。しかし、一日でも早くこの問題が解決するように、たとえ小さくても、三つのことを行つていきたいと思つています。

一つ目は、北方領土についてもつと詳しくなることです。ロシアの考えや、北方領土の歴史を知ることで解決しない理由が明確にわかると思うからです。

二つ目は、北方領土に関するイベント等に自ら参加することです。

三つ目は、学んだことを家族や友人、先生に伝え、広めることです。

この三つを行い、人々に北方領土に関心をもってもらい日本国民が、一丸となつて考えていけばきつといつか解決すると思ひます。

そして、ロシアと日本が交流し合ひ、笑い合える関係になるように、日々考え続けていきたいです。

富山県市長会会長賞

北方領土のつながり

富山県立奥田中学校 三年 朽木 秋穂

現在も続いている日ロ間での北方領土問題。この問題はニュースなどで耳にすることは多いものの、私は日本とロシアが領土を取り合つているという漠然としたイメージしか持っていませんでした。こうして作文という形で向き合う機会が無ければずっと何も知らないままだったかもしれません。しかしこの問題について調べていくうちに北方領土が歩んだ歴史や今、私が住んでいる富山県との意外なつながりを知りました。一体北方領土とはどのような立ち位置なのか、日本とロシアそのどちらの人々も納得できる解決策はないのか私は真剣に考えてみました。

まず日本側はロシアが北方領土の島々である択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島を不法占拠していると主張しています。これに対してロシア側は第二次世界大戦に勝つたが故に北方領土を得たと主張しています。大戦後に結ばれたサンフランシスコ平和条約の中で日本は千島列島を放棄し

ました。ロシアはこの千島列島の中に北方領土が含まれていると解釈しているのです。しかし一八五五年に結ばれていた「日魯通好条約」では、千島列島に北方領土は含まれていませんでした。つまりロシアの過去の認識を肯定するならば、現在の認識が間違つているということになるのです。この矛盾した認識を正すことを行わなければいけないと思ひます。

私が生まれ育つた富山県と北方領土には深いつながりがあると知つた時、私はようやく気づきました。無関係だと思つていた私たちの先人が辛く厳しい環境の中で北方領土を開拓していたように、今自分達は無関係だと思つている人々にもつながりがあるのだということ。誰一人としてこの問題に無関係な人はいないのです。一部の人のみではなく日本国民全員で返還を求め、声を上げなければロシアの人々に私達の思いは届かないと思ひます。

調べていくうちに私は四島全て、返還を求めるのは本当に正しいことなのか疑問が出てきました。現在の北方領土にはロシアの人々が暮らしています。いきなり日本にこの島々は返還されたと言われたら彼等は困り、様々な問題が起る可能性があり、日ロ間で更に友好的関係を築くために私は北方領土を双方の国で半分に分割すればいいと思ひ

ました。それぞれの島で得られる資源などもお互いが同じ利益になるよう均等に分ければ平和的な解決ができるのではないかと思います。ただ北方領土を返せと主張するのはなく相手の立場や思いなどに理解を示すべきです。

北方領土は私たち日本国民にとっての故郷であり、守るべき宝です。先人達が厳しい環境の中で作り上げた島々が一部でも一刻も早く返還されるよう、周りの人たちに伝えたいです。北方領土は私たちにとって決して、無関係ではないのだと。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

今僕たちがやるべきこと

魚津市立栗部中学校 三年 札谷 光平

今も日本が返還を求めている北方領土。

日本が第二次世界大戦で降伏してから、ソ連は突然シエムニウ島への攻撃を開始し、次々と千島列島の島々に上陸しました。その当時、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島

には約一万七千人の日本人が住んでいましたが、ソ連の命令で一九四八年までに本土へ強制的に引き揚げさせてしまいました。日本ではこれらの元島民を中心に、戦後すぐに返還要求運動が始まりました。一九四五年からずっと北方領土はロシアに不法占拠されたままです。それは誰でも知っているでしょう。しかし、北方領土のこと、元島民の方々の考えや思いは知らない人も数多くいます。僕もその一人でした。だから北方領土のことを知ることが、北方領土返還の第一歩になると考えられています。

僕はこの夏、実際に北海道に行き北方領土について少しだけ勉強してきました。

北方領土は日本固有の領土で元島民の方々の故郷ですが、今ロシア人が住んでいることによつてそのロシア人の故郷になりつつあることも事実です。確かにロシア人は日本人側からすると許しがたいことをしました。それは決して忘れてはいけません。しかし、今日本人とロシア人がお互いのことを尊重し、仲良く一緒に暮らしていくことが両者の共通の考えになれば、この北方領土問題は少しずつ解決していくように思います。

北海道の納沙布岬には、各県の名前が記された石がたくさんありました。その中には富山県の名前が彫られたもの

も含まれていたのを見て、「富山県もちゃんと北方領土返還要求に参加しているんだ」「決して僕たちも無関係なことではない」と心に刻みました。

今年二〇一四年は「日露武道交流年」だそうです。この機に日本とロシアがよい関係を築くことができたらいいなと思います。僕は柔道というとても礼儀作法が大事な武道をしています。

「心身の持つすべての力を最大限に生かして、社会のために善い方向に用いる」という「精力善用」と、

「相手に対し敬い、感謝することで、信頼し合い、助け合う心を育み、自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしよととする」という「自他共栄」

この「精力善用」「自他共栄」の精神を北方領土の歴史や元島民の方々の思いと共に、少しでも沢山のの人に伝えることが僕の役目だと思います。

そして願わくは同じ釜の飯を食うような関係を築きたいです。

入 選

今、私が北方領土について思うこと

入善町立入善西中学校 二年 野澤祐里歩

私が初めて北方領土について知ったのは小学五年生のときです。社会の授業で択捉島を学んだときに少し北方領土のことを学習しました。しかし、今回の北方領土出前講座をうけるまで詳しいことは知りませんでした。いろんなお話を聞き、私が感じたことは二つあります。

一つ目は北方領土に住んでおられたかたは故郷を愛していたということです。いつロシアが襲ってくるかわからないなか、そこに逃げるときまで残っていたのは、きつと故郷の北方領土を大切に思っていたからだと思います。お話を聞いたとき、元住民の方は

「またすぐに戻ってこられるだろうと思つて大きな荷物を持つていかなかった。」

と言つておられました。それは故郷への信頼の気持ちがあつたからではないかと私は感じました。また、今このように活動しておられるのも故郷への愛があるからだと思

ます。厳しい環境のなか、立ち向かい北方領土を守ろうとしている姿に刺激を受け、私も何かこの町をこれからも守るために力になろうと思いました。

二つ目はなるべく早く、この北方領土の問題を解決しなければならぬということです。私はこの間、歴史の授業で樺太・千島交換条約について学習しました。そのとき、ロシアは北方領土は日本の領土であると認めています。しかし今の北方領土には一万六千四百人のロシア人が住んでおり、その他にも八百億円かけて建てられたさまざまな施設があります。本来ならば私たち日本人が暮らしているはずなのに、住むどころか昔あつた家までもロシア人が建て直してしまつています。少しでも早く問題を解決し、昔の暮らしがよみがえることを私は強く願っています。歴史上での条約を破る強引なやり方は、画国にとって良いものとは言えないと思います。日本もロシアも納得し、北方領土に住んでおられた方々が幸せに暮らせる方法を、私たち若い世代も考えていかなくてははいけないと感じました。

この北方領土問題は今後の歴史にも関わる大きなものだと思います。たくさんの方の故郷への思いに私たちも添えていくべきだと思います。習名活動や呼びかけなど、小さなことでも、集まれば大きな力になります。他人ごとだ

と思わず、今の自分にできることを考えていくことが北方領土を守るための一歩なのではないでしょうか？

入 選

北方領土について思ったこと

黒部市立鷹施中学校 三年 野村あかね

私が北方領土問題を知ったのは、小学校五年生のときでした。当時の担任の先生が熱く語り、返還を求めていることがとても思い出深いです。

さて、今回、再び北方領土について学び、私が一番印象に残ったことは、北方領土から逃げてきたおばあちゃんのお話です。そのおばあちゃんは、島での暮らしを楽しそうに話しておられました。こんぶ漁を子どもながら一生懸命手伝つたこと、雨でこんぶを干せない日にだけ小学校に行つたこと、卒業証書を力強くもらつたこと。どれも本当になつかしそうに話しておられました。そして、最後には、「島での暮らしは忙しかつたけれど、楽しかつた。」

と、どこか切なそうにおつしやつていました。そのとき、私は怒りと悲しみでいっぱいになりました。

怒りというのは、ロシアに対してです。戦争に負けて絶望している日本に、降伏後も攻めて、故郷までをも奪い取るなんてひどすぎると思いました。悲しみというのは、おばあちゃんのように故郷に帰ることができずに、亡くなつてしまつた人たちの想つてです。ここ富山県には一四二五人の人が引揚げてきたそうですが、既に八三五人の人が亡くなつてしまつたそうです。そこで私は思つたことがあります。今、北方領土に住んでいる人たちは、このことを知っているのかなど。

私はぜひ、このおばあちゃんの想いを島にいる人に伝えたいと思いました。そして、島に住んでいる人はどう思っているのかを教えてほしいと思いました。大統領の話でなく、島民のかたの話を知りたいと思いました。互いにおつかりあえば、いい解決策ができるかもしれないと思いました。

私は、あのおばあちゃんが島に帰ることができ、笑顔になることを願い、北方領土返還をうつつえ続けようと思います。

入 選

関心と意見を

立山町立雄山中学校 三年 酒井 舞

北方領土。みなさんはこれを聞いて何を考えますか。私の北方領土に関する知識はほんのわずかです。北方領土について聞かれても北海道の上の方の四島をめぐつて日本とロシアでもめている問題くらいしか答えられません。しかし、そんな私でも北方領土に対する関心と意見はもつています。

北方領土は日本のものだから早く奪つてしまえ。こんな意見をよく耳にしますが果たしてこれは日本とロシアどちらにとつても最善の策なのでしょうか。私も昨年までは日本のものだから早く日本が占領すればいいのにと考えていました。しかし、三年になり社会で戦争について学んできました。自分の考えは正しいのだろうか疑問をもちはじめました。領土をめぐる戦争を知つたからです。もし日本がロシアから強引に北方領土を奪つたり、勝手に占領したりすればロシアは少なくとも怒るはずです。そして日本

に攻撃してきたとするならば、安倍首相の考えからいくと日本も武力を使うことになり、戦争に発展しかねません。戦争になれば国民にも大きな被害を与えるでしょう。こうなってくると今まで他人事のように考えていた北方領土問題はもはや関係ないとは言いきれません。これは竹島や尖閣諸島の問題でも同じだと思います。中国や韓国と戦争する可能性だって十分にあります。

領土問題は丁寧に慎重に解決を目指すことが大切だと思います。また自分達の意見ばかりで自分達の思いどおりにしようとするのはよくないと思います。ロシア側の視点から見た北方領土問題も必ずあるはずですよ。ですから相手の考えもよく聞き、広い視野・多くの視点から考えていくことも大切だと思います。しかし長い間続いている北方領土問題を簡単に解決できるはずがありません。だからこそ、今までのような人に頼った考えではなく、もっと国民一人一人が関心をもち意見をもつということも必要だと私は考えています。

そこで、まずは自分の意見を多くの人にしっかりと伝えていこうと思います。そうすることでお互いに意見を伝え合って色々な意見を知り、また新たな意見をもてます。そしてこの意見がほんの少しでも北方領土問題の現状を改善

する手助けになつていけば、きっとその先に待っているのは、両国の和解なのではないでしょうか。

入 選

ロシア人とはうまくやっつけていけるのか

青山市立城山中学校 二年 笹山 奈摘

日本人の中に、ロシアに対しマイナスイメージを持っている人は少なからずいるのではないだろうか。その大きな要因の一つに北方領土問題がある。北方領土問題とはわかりやすく言うと、昔戦争により領土のやりとりが行われたが、戦争が終わった今もおロシアが条約で決めてはいない日本の領土を不当に占拠している状態が続いているという問題のこと。

近年はただ占拠している訳ではなく、多額の資金を投入し、再開発を行っている。二〇〇七年～二〇一五年に投入される額は八〇〇億円である。

確かにこの話を聞くとロシアとの関係は良くないように

思えるが、ロシア人はそうは思っていないらしい。日本の外務省が平成二十二年にロシア人に行ったアンケートでは両国の関係を良好・とても良好と評価した人は七十二％にのぼる。またロシア人の中には親日家が多く、日本の文化は高く評価されている。日本の映画や小説、アニメなども大人気で日本語学習もさかん、モスクワには多くの寿司屋や日本のうどんチェーンなどが並んでいる。

そういったことを考えると北方領土問題というのは尚更早く解決すべきである。国と国の仲が悪くなるということは国民が相手国の人間を憎むことにつながる。日本とロシアはうまくやっつけていける可能性を十分に残しているのに、憎み合う関係になるのは好ましいこととは言えない。

問題解決の鍵をにぎるロシアのプーチン大統領も実は親日家として有名である。日本の文化を愛していて、柔道は八段の腕前らしい。

また二〇二〇年の東京五輪委員招致の際には、自国だけでなく、他国の国際五輪委員にも東京に投票するよう働きかけるなど協力を惜しなかつた。政治の中に私情を持ち込むことはできないが、彼が日本を心から憎んでいる訳ではないことが両国にとってプラスになると私は思う。

いがみ合うことが良いことではないということとは誰の目

にも明らかである。ロシア人が私たち日本人を良く思ってくれているように、私達もロシアの人たちを愛せるようになりたい。そのための第一歩が北方領土問題の解決なのだ。

入 選

北方領土と日本の関わり

射水市立小杉中学校 二年 中村 敬介

北方領土とは、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島のことを指します。

ぼくが北方領土について興味をもったきっかけは曾祖母が、

「この家の先祖は北海道にいて北方領土と関係があつたんやよ。」

と言っていたことで、また、ぼくの社会の先生が生徒と北方領土に行ったことがあると言っていて更に興味をもちました。そして、ぼくは本やインターネットで北方領土につ

いて調べてみるとあることについて主に書かれていました。

それは、北方領土問題についてです。これは北方領土を現在占領しているロシアに、日本が返還を求めている領土問題です。なぜ、今ロシアが北方領土を占領しているかというと一九四五年（昭和二十年）八月十四日に日本がポツダム宣言の受諾を決定した後、一九四五年八月二十八日から九月五日にかけて、ソ連軍が北方領土に上陸し占領したからです。北方領土はソ連からロシアに継承し現在も支配されています。

このことからぼくは、今はどの国の人が住んでいるか調べてみました。すると、今はロシア人が住んでいることが分かりました。また、ロシアは様々な民族が住んでいる国なので、北方領土に住んでいる人も様々です。ちなみに、現在北方領土には日本人は一人も住んでいません。しかし、終戦前は約一万七千人の日本人が住んでいました。その内、富山県民は約千四百人でした。

なぜ、北方領土に多くの富山県民が住んでいたかという点、北方領土と富山はかかわりがあったからです。第二次世界大戦までは漁業でかかわっていました。最初のかかわりは出稼ぎだったそうです。

北方領土問題を解決するにはどうすればいいかは考えました。そして、ぼくはどちらの国も納得できると思う案を考えました。それは、ロシアが北方領土の占領をやめて、日本人も住んでいいことにすることです。でも、この時ロシア人を追い出したりはせず、両国どちらも北方領土で暮らせるようにする。なぜなら、ここでロシア人を追い出したりすると、日本はロシアにやられたことをそのままやり返すだけになってしまうからです。また、北方領土で生まれ、育ったロシア人にとっても北方領土は故郷なのです。故郷から追い出された経験を日本はしています。だから故郷から追い出された時の気持ちも分かっているはずですよ。

ぼくはどちらの国も納得できる形で北方領土問題を解決するべきだと思います。ぼくは北方領土に行つて、そこで実際はどのようになっているのかを知り、そこにいる人達の話聞いてもつとたくさんのどちらの国も納得できる案を考えたいです。そして、北方領土問題の解決に少しでも貢献したいです。

入 選

危機感の違い

氷見市立西條中学校 二年 針山 朋子

私は、夏休み中に一泊二日で「北方領土を考える会」に参加しました。楽しそうという安易な考えだけで参加した私でしたが、日本がかかえる問題の重みを知りました。

北方領土を考える会で、資料をまとめて一班で一枚のレポートを出す活動をしました。元島民の方のお話や、根室の高校生のお話を聞くことができました。元島民の方は、北方領土で過ごした子供時代について語って下さいました。主にじゃがいもを主食とした自給自足の生活で、食べ物に苦労はしなかったそうです。しかし、離島であるため病人が出たときには大変困ったとおっしゃっていました。辛かった経験をも赤襟々に語って下さった元島民の方のお話は大変興味深いものでした。お話の中で驚いたことが一つありました。それは、北方領土に移住してきたロシア人達と二年間同居していたということです。しかも仲良く生活しておられたそうです。私は日本人とロシア人は土地

の奪い合いなどで仲が悪いと思っていたので、驚きました。言葉もどんどん分かるようになってきて、ロシア語を話す子供が増えたそうです。日本人とロシア人の交流は北方領土で生まれていたことが分かりました。現在、北方領土にいるのはロシア人だけですが、平成十一年からは先祖の墓参り等の自由訪問ができるようになったそうです。私は、日本人とロシア人が仲良く暮らしていたこの二年間が交流の第一歩となったのではないかと思います。北方領土は、実際は日本の領土です。北方領土から追い出された元島民の方々を、先祖たちが眠る故郷へと帰してあげるべきだと私は思います。北方領土がロシアの土地となつてから長い時間が経ちました。元島民の方々の高齢化が進んでいます。私は、日本人みんなが、もつとこの現状を理解し日本中が一体となつて、行動を起こすべきだと考えます。

出前講座で教えて下さった根室の高校生の方々が、日本の中学生は、北方領土について勉強するけれど、ロシアの中学生は北方領土問題すら知らない、とおっしゃっていました。解決までの道のりは遠いと痛感させられました。ロシア人と日本人では北方領土に関する考え方が全く違っていました。もつと若い人達にこのことを広めていくことが大切です。そして、もつと互いの国を理解し合うことが大

切です。沖ノ島が危ない今、日本はこれ以上領地を失う訳にはいきません。北方領土を取り戻す必要があります。私がしたような体験を他の人たちもするべきです。きつと考え方が変わります。北方領土に対するみんなの関心を高め、日本全体で危機感を持つべきだと思います。私は、一人でも多くの人に自分が学んできたことを広めます。そして、同じ思いの輪をもっともつと広げていきたいです。

入 選

北方領土返還への大きな力

小矢部市立石動中学校 三年 西 航大

僕は、「第四十五回富山県北方領土復帰促進事業」に、「少年少女派遣団」として参加し、生まれて初めて、北海道を訪れた。

八月三日。「北方領土返還要求根室市民大会」に参加した。アピール行進で、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の早期返還を願い、声を上げた。車道を数百mにもわたつ

て埋め尽くした大行進は、「北方領土は日本のもの。絶対に取り返す！」という地元住民の熱意を、広く世の中に伝えるものだった。

その後「北方四島交流センター」で、地元中学生と意見交換をした。彼らの中には、家族が元島民という人も多く、北方領土問題について、豊かな知識を持っていた。この問題を、全国の人に理解してもらうためにはどうすればよいか。僕達は共に考え、方法の一つとして、北方領土を学ぶための施設や講演会を、より広い地域で開催することを提案した。

また、もう一つの方法として、北方領土が日本に返還された際のメリットを、具体的に示すことも必要だと話し合った。北方系の魚介類が手に入り易くなる、鉱山資源の利用が期待できる等のメリットは、返還要求運動を、全国規模で行い、盛り上げるための起爆剤になると考える。

しかし、僕は色々な人から話を聞いているうちに、日本の立場を一方向的に訴えても、北方領土問題は解決へと進まない、ということを感じ知らされた。

北方四島のうち、歯舞群島を除く三島には現在約一万七千人ものロシア人が生活をしているという。その中には、僕達と同年代の子供や若者もいる。元島民の方々がそ

うであるように、ロシア人の島民にとっても、そこが「故郷」なのだ。

四島が晴れて日本に戻ってくる、という希望の裏側には、ロシア人の島民が今度は故郷を離れなければならない、という現実が待っている。たとえ領土が、歴史的、国際的な取り決めで「日本固有のもの」だとしても、慎重な話し合いの上、十分な対策を練る必要があると考える。

八月四日。北方領土が見えるという「納沙布岬」を訪れた。僅か三七km先に、歯舞群島の「目殺島」があるはずだが、残念ながら濃い霧に阻まれ、見る事ができなかった。

「こんなに近いのに、島が見えない…」

この時、僕が感じた思いは、「見えるのに、故郷に戻ることができない」元島民の方々が抱いている思いに、通じるものがあるだろう。もどかしさ、はがゆさ、不安等を、たくさん抱えて、今を生きておられると察するからだ。

僕は、この派遣事業で学んだことを、まずは家族、友達というように、身近なところから伝えていこうと思う。そして日本国民全体が、北方領土に関心を持ち、考えを深めるようになれば、長く続くこの問題を、解決へと向かわせる「大きな力」となるだろう。